



蛸親爺

第10話 ゆでだこ

雅^が雲^{うん}すくね

「たーこ、たーこ。たーこ、たーこ、今日も日が暮れるねえ。ゆくりなく川は流る、か」

河原の堤を丈の低い草が覆い、群がる薄^{すすき}が風の吹くまにまにうねりを打って揺れている。夕日に向かつては、雁^{かり}が群れをなして去る。蛸は土手の腹に寝そべり、そよ吹く風に靡^{なみ}きあう草に隠れる。手にはカップ酒を持ち、カップの縁を嘗めている。

堤の上を犬が来た。秋田犬である。

「わん」と一吠え。

「おっ、おめえさんかい。こっちに来な」

犬は堤を駆け下りて、蛸と並んで坐った。蛸より二回りほど大きく見える。

「わん」

「え。何をしているのかって。こうしてな、たまに河や鉄橋をただ眺めていたくなるのよ」

堤の上の交通は増すが、土手の叢^{くさむら}に寝そべる蛸に気をつく者はない。水際には、眉毛の真っ白な爺さんが畳み椅子に坐って、憂いのないけしきで釣り糸を垂れている。

「ほれ、見る」と蛸は鉄橋を指した。

「鉄橋の上だ。電車があわして、やって来てはすれ違う。レールに乗っていたらな、行く所は決まってる。行く所がある分、上等だな。昼間は空いている黄色い電車が右や左へ行き去って、だんだん腹に多くの人を抱えて行くんだ」

「わん」

「おめえさんと同じよ。皆、目当てがある。皆、誰かの役に立ちてえと思
って、毎日通うのさ」

「わん」

「ありゃ、慣れよ。朝から晩まで働きゃ、そりゃくたびれるわな。しかし、
人間は動いていないとな。へへっ。おれもなあ。三十年もあややって、毎
日毎週、家内の作った弁当を提げて通ったものだなあ。我ながらよく通っ
たものよ」

「わん」

「まあなあ。まったき健康になるのを待って働こうとしたら定年迎えちま
うよ。かつたるいからって働く力がないわけじゃねえからな。とは言え、
四十過ぎてからは、無理をしねえこつがわかってきたがな。近頃じゃ、心
身ともにかえって軽快よ」

「わん」

「ありがとうよ。ただな、どうもな。生活が。どうも、こういう生活も、
いや、生活とは言えねえな、こういう情態もしまいになってくんのかねえ」
蛸の傍で雀が鳴く。群がり飛ぶ鳥のねぐらへ帰る音が連なる。

「どうにも真面目になりたいねえ。真面目になれないからせつないんだろ
うねえ」

「わん」

「人間てのは、そこかしこにしがらみがあってなあ」

「わん」

「犬にだって縄張りがあるから、勝手なまねは出来ないってか。そうだ
な。犬ころも何やかやと、ありそうなものな。このあいだもよ、ぶらぶら
歩いていたら、二階家の張り出しの上から黒い子犬が吠え立てるのよ。下
で散歩していた犬に。体が跳ねて飛び出るくらいな吠え方で」

「わん」

「そうだな。ありゃ、自分の飼われている家のまわりも自分の縄張りだと思
ってんだな。犬はひろい場に置くと、すべて自分の縄張りだと思っちゃ
うから狭い場で安心させてやるのか。犬には犬の社会通念ってものがある
らしくて、吠えかけられた犬の方も、何やら済まなさそうに歩いていたっ

け。往来の端を嗅ぐ振りして、早く立ち去りたいってけしきだったが、それを飼い主には気取られたくない風にも見えな

「わん」

「飼い主の手前、様にならない姿は見せられないか。しがらみだな。おとついなんてよ。通りの先に、女の子が大きなふさふさした犬を三匹散歩させてんのよ。引っ張られていたけれどな。三頭立ての馬車の様だったぜ。それが横丁に入ったと思ったら、またすぐに出てきて、通りの方を行ってさ。あとから横丁に入ったら大男が、これまた鋼鉄のごとき犬を連れてんのよ。ははあ。と合点がいったわ」

「わん」

「犬はまわりを気にする性質があるってか。そうか」

「わん」

「そうだな。付き合うなら、利害の切り合わねえ気楽なのが一番だ。他人に物を言う時にゃ、優しく言わねえとな」

入り日が蛸の正面から射る。烈しい夕映えに照らされ、土手の草一面が朱に燃えんとし、蛸は金色にかがやく。犬は薄の銀を含んで流れる川の面を眺める。風が土手の向こうに降りて行く。

蛸から湯気が立ち昇ってきた。

湯気はまた紅の夕日に映じ、蛸の頭の上で波紋をなす。

「熱、熱」と慌てた蛸が頭を掻き撫でた。

「ふう。夕日とは言え、茹蛸になるところだった。蛸は肌が弱いんだ。そろそろ、帰るとしようか」

「わん」と犬は蛸に背を向けてしゃがむ。

「乗っけてってくれんのかい。優しいねえ」

蛸は犬の背に乗り、堤の上を帰る。

「たーこ、たーこ、たーこ、たこ」

往来の流れを横切って、婦人が猫を紐で引く。猫は犬の様について行く。